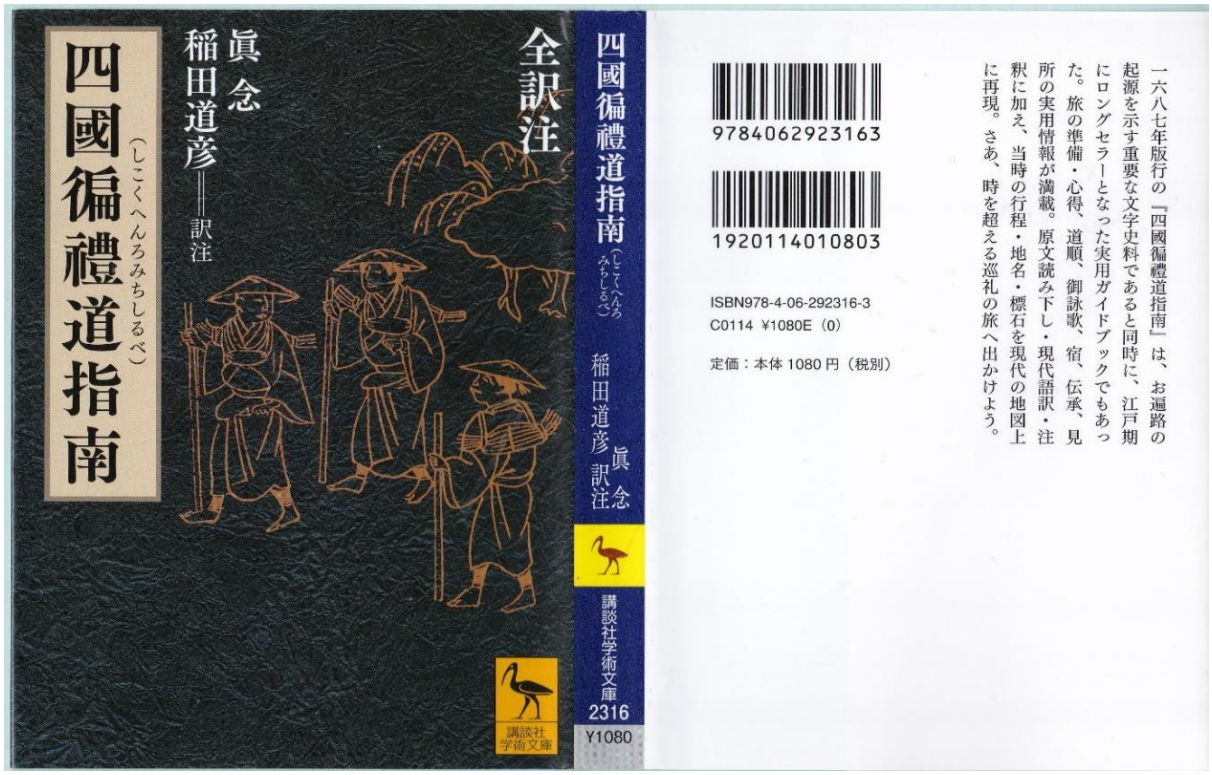
=市史編さん便り=　【48 号】 令和 3 年 11 月 10 日（水）発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

真念の『四国徧禮道指南』について・・・

真念庵の試掘調査が先月 28 日に終了した。市内市野瀬地区に所在する真念庵を建立したのは「四国遍路の父」真念である。先日、この真念の書いた『四國徧禮道指南（しこくへんろみちしるべ）』について職場で話題にあがった。そのときにある方に講談社学術文庫『四國徧禮道指南（しこくへんろみちしるべ）』の文庫本（2015）をお借りして読む機会があった。この本は、香川大学名誉教授・稲田道彦氏が書いた訳注本である。全 331 頁から構成され、そのうち 124 頁（約 3 分の 1 強）が『四國徧禮道指南』の本文を翻刻したものであり、残りの約 3 分の 2 弱は、それを稲田氏が訳注した内容である。そこには 1 番から 88 番霊場までの各寺堂等の立地状況・本尊・霊場間の距離・簡単な行程等が紹介されている。今ふうに言えば四国遍路のガイドブック的書物である。

江戸時代は版木刷りの和綴本であり、当時の人々に愛読され、明治に入ってからも使用されていた。そして、結果的に多くの人々を四国遍路に誘うこととなった。私は、この本を丁寧には読めてはいない。ざっくりと通読した程度である。ゆえに、もしかしたら読み違いもあるかもしれないが、この機会にその要点と思う箇所を掻い摘んで皆さんに紹介していきたい。

江戸時代は「四国遍路」において「徧禮」の字を使用していた。時代が下るにつれ



て「遍路」に変化していった。「徧」の字は、「広くゆきわたる、あまねく」という意味で、現在使用されている「遍」の字と同意である。「禮（礼）」とは、単なる道ではなく、人として生きる道との意味を含んでいるという。禮の漢字を使用したということは、「へんろ」という行為に人の道を求める修行者という意味を込めたかったのであろうと稲田氏は考察している。

ここで土佐清水市域とその隣接域に着目し、稲田氏の訳注を読みながら、考察してみたい。37 番霊場・窪川岩本寺から、現在の黒潮町・四万十市を経て、伊豆田峠を越えて市野瀬村へ。ここに真念庵という大師堂があり、遍路に宿を貸している。篠山を通っていくときには、この庵に荷物を置いて 38 番霊場金剛福寺へと向かう。月山(現在の大月町大浦)に行くときは、荷物を持っていくように指示している。初めての遍路の場合は篠山に行くのが慣例とあり、月山と篠山についての道案内は真念庵で尋ねるよう記述されている。金剛福寺から月山までは 9 里とある。

また、金剛福寺から 39 番霊場・延光寺までは 13 里あり、真念庵に打戻り、ここから谷川に沿う山道で成山村・狼内村を通る。上長谷村に標石がある。そして、江ノ村を中筋川が流れており、増水のときは、この村の庄屋や長老が川渡しを助けてくれることが記されている。磯ノ川村・焼米坂・ありおか村・山田村を経て、延光寺に至る。このように、『四國徧禮道指南』は遍路のガイドブックであるとともに、お接待文化を育んできた地域の人々との交流の記述も見逃すことができない。以上のようにその行程について要所ゝポイントをまわりくどく書かず、要点を絞り、極めて簡潔に記している実用的な書物である。特に、真念庵から三原村や四万十市を抜けて、延光寺に向かう際に道を間違えて迷わないようその注意点が分かりやすく書かれている。

稲田道彦氏によると『四國徧禮道指南』は改定本である。最初の版本は『四國遍路道指南』であった。その出版は貞享 4 年(1687)と推定されている。１頁の行数が６字の場合は『四國邊路道指南』、８字の場合は『四國徧禮道指南』という。様々な研究から『四國徧禮道指南』は元禄 11 年(1698)以降の出版といわれている。

いずれにしても、真念によって書かれた遍路道ガイドブックを基にし、江戸時代を通じてその版木により改訂されながら、発行され続けた。遍路信仰と地域文化のつながりの深さを痛感したことであった。皆さんにも一読をお薦めしたい。

【編集後記】

ウォーキングしていると時折吹く冷たい風に冬の到来を実感します。しかし、段丘面の道路脇にツワブキの黄色い花が所々咲いており、自然に咲く野辺の花のたくましさと美しさを感じます。野に咲く花は、環境を選びません。基本的に種の落ちたところに根を張り、精一杯の花を咲かせます。バラやボタン等の華美な花にはない自然の持つ美しさがあります。人間も野辺の花から学ぶべきことがたくさんあると私は思います。

寒さに負けず、自分の果たすべき役割を自覚し、精一杯に地道に取り組んでいかなければならないと思います。皆さんも寒さに負けず、健康第一でお過ごしください。ファイト！（田村）